

「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・  
コパフィールド」の影響について

南 田 みどり

The Influence of 'David Copperfield' on 'As Sure as the  
Sun Rising in the East'

Midori MINAMIDA

As we have already found, the setting of 'As Sure as the Sun Rising in the East' (Thein Pe Myint, written in 1953-57) is influenced by 'Fall of Paris' (Erenburg, written in 1942), which is evidently anti-fascism. But Thein Pe Myint did not adopt its main techniques for his 'As Sure as the Sun Rising in the East'.

The prural point view is the synthetic way of catching the complicated historical background as thoroughly as possible. But 'As Sure as the Sun Rising in the East' did not adopt such a point of view but the view of the first person narrator. It is more of style found usually in an autobiography.

The characterization of the principal who is Tin Htun is made by describing his own thoughts and characterization of others follows by Tin Htun's impressions on them. I think that the autobiographical style of this novel might be brought from 'David Copperfield' (Dickens, written in 1849-50), which was the most favourite foreign literature of Thein Pe Myint.

The contents of this paper are as follows.

1. The comparison of these two novels
2. The reception of English literature by Thein Pe Myint
3. The impression of 'David Copperfield' by Thein Pe Myint
4. The relation between the common points and the influence

## はじめに

テインペーミン (1947-78) は、その長編「東より日出ずるが如く」が影響を受けた作品に、エレンブルグ (1891-1967) の「パリ陥落」(1942) だけをあげている<sup>1)</sup>。彼は「パリ陥落」の、ナチス侵略前夜から直後という時代設定と、レジスタンスの萌芽を示す結末を、「東より日出ずるが如く」の中に、日本軍侵略前夜から直後という時代設定と、抗日の萌芽を示す結末に利用した<sup>2)</sup>。これは、反ファシズムを闘った同時代作家としての共感による意識的受容によるものであった。

しかし「東より日出ずるが如く」は、「パリ陥落」のように、激動期の再現に効果的なはずの、各思想潮流を代表する典型的人物による多元的視点をを用いない。主人公の視点と語りで、その自己形成の中に激動を描く。

この点で、テインペーミンの青春時代の愛読書だったという、ディケンズ (1812-70) の「デイヴィッド・コパフィールド」の影響の有無が気にかかるところである。そこで本稿は、比較と受容の経緯から、「東より日出ずるが如く」への「デイヴィッド・コパフィールド」の影響を考察するものである。

## 1

二作は、はたしてどの程度共通点を持つのだろうか。おおまかな比較を試みれば、まず二作はともに、章題のついた多くの章から成り、冗長で一気には読めない。これは、むしろ出版条件の共通性によるものである。「東より日出ずるが如く」(73章)は、1953年6月から57年10月、4年余にわたり月刊ミャワディ誌に連載された。「デイヴィッド・コパフィールド」(64章)は、1849年5月から50年11月、一年半にわたり分冊月刊で出版された。この分冊形式は、傍筋や挿話が各冊の頁を整える役割を果たしたという<sup>3)</sup>。定期出版という条件と、作品の密度の希釈・冗長性は、ある程度相関すると考えられよう。

次に、二作の題名の意味をとらえれば、「東より日出ずるが如く」は、「陽の東より出ずるごと必ずや来たらん 我が時代」という「我等ビルマ人協会歌」<sup>4)</sup>の一節に由来する。それは、太陽が東から出るのが自然であるように、先祖代々ビルマに住むビルマ人がビルマの主人となるのが当然であって、その日は必ず再来するという意味である。作品第10章で、主人公ティントゥンが元郡長を相手に、執拗にこの歌全節を解説する。それは特に、題に用いられた一節が、作中重要な意味を持つからである。

この一節は、後に日本軍の侵略を合理化する世論操作に巧みに利用された。1940年頃から、様々な落兆<sup>5)</sup>が復活した。それは、英国支配の崩壊を予言するものと解釈された。この歌の一節も、東方から昇る朝日の旗をかかげた救世主がやってきて、ビルマを異民族支配から解放するという意味に曲解された。旗は日章旗で救世主は日本軍だとささやかれた。

「東より日出ずるが如く」は、この歌と共に成長した我等ビルマ人協会の最大の反英闘争である1300年闘争<sup>6)</sup>を一つの山場にして、この歌の曲解の中で日本軍を迎える1942年、歌の真意を解する少数者の抗日決起で結ぶ。歌の一節が題名になったのは、その歌がロズさまれた時代を再現して、その意味を確認するためであったと考えられる。

一方、「デイヴィッド・コパフィールド」は、主人公名が題となる。その意味は、具体的な原題によって明らかとなる。それは「ブランダーストーン・ルッカリーの二代目デイヴィッド・コパフィールドの生いたち・冒険・体験・並びに観察」<sup>7)</sup>というものである。時代の典型的個人の視点で独立闘争と青春を語る「東より日出ずるが如く」に対し、「デイヴィッド・コパフィールド」は個人の身边を語るものである。題名の意味するところにも、二作の共通性はない。

次に二作の構成をたどれば、「デイヴィッド・コパフィールド」は、一、出生から困苦を経て伯母の庇護下へ(14章)、二、学校時代(8章)、三、就職・結婚・再婚などの社会人期(40章)、四、十年後の後日談(2章)におよそ四分される。主人公の歩みが順調に語られるのは、第一の生いたち部分だけで、残る部分は脇役たちの傍筋や挿話が、主人公の観察で豊かに語られ、彼の私事より光彩を放つ。原題の「生いたち・冒険・体験」よりむしろ「観察」に比重が置かれるのである。

「東より日出ずるが如く」にも、主人公と著名人の交流(第14, 32, 44, 49章)や、主人公のかわった印象的人物(第29, 46, 53章)や、亡くなった著名人の思い出(第50章)や、友人たちとの雑談(第39章)など、省略しても筋の進行を妨げない章は少なくない。しかし、「デイヴィッド・コパフィールド」のように、脇役の身にふりかかる事件の観察が筋の進行を曖昧にするには至らない。

「東より日出ずるが如く」は、一、生いたちの回想(5章)、二、1938, 39年の1300年闘争をめぐる学生運動(49章)、三、日本軍侵略前夜と抗日決起(28章)におよそ三分される。各構成部分の文体は微妙に異なる。第一の回想部分は、敢えていえば「デイヴィッド・コパフィールド」冒頭風の、随想風自伝的文体、第二の部分は、挿話も入るが、新聞記事、声明、闘争現場の状況など記録性が増す。文学というより歴史書だという批判が一部にある<sup>8)</sup>のも、三部分中最も長いこの部分のおかげである。第三の部分では、不倫の清算や恋人の死などの劇的要素も加え、正義のたたかい抗日にむかって、筆致は闊達となる。

ここから、二作の共通点が、一人称の語りで、とりわけ冒頭部分で生いたちが随想風自伝的に描かれる点に見い出せる。冒頭に生いたちを配した構成も、一見類似するが、内容の展開は異なった。それは、自己形成の相違によるものといえよう。二作は、片や自己形成と併行して独立闘争の流れが筋を規制し、片や自己形成の流れを傍筋挿話が侵食するなど、自己形成だけが作品のすべてではないとはいえ、筋の大枠には自己形成が用いられているという共通点がある。しかもその自己形成の展開の相違が、二作の決定的な違いとなっている。

そこで、二作の自己形成の展開をたどれば、デイヴィッドは、純真で優しく素直で嫌味がない。誠意と努力で困難<sup>9)</sup>にたちむかう。彼の困難とは、両親の死という運命のいたずら、義父や恋仇ユ

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コパフィールド」の影響について

ライアなど人並みはずれて性格の歪んだ者たちの陰湿なしうち、一時的なじり貧生活などである。社会の底辺にうごめく者たちへの優しい理解はあれど一線は画し、政治に興味はあっても深入りせず、彼は作家として成功し、幸せな家庭も築く。作家活動の詳細は語られず、地位と名声と経済的安定と愛の獲得を持って自己完結となす立志伝を大枠とする。

一方、ティントゥンは、強烈な個性のない平凡な人物で、人並みのうぬぼれも動揺性も持つ。当時の多少進歩的学生の典型として、闘争の挫折感、日本軍への過信、人妻との過ちなどを犯す。断片的に文学感もあらわれ、作家をめざすが、卒業後は新聞の外電翻訳者にとどまり、職業的成功はない。富や幸せな家庭の保障もない。その自己形成は、大半のビルマ人が日本軍の本質を見破れなかった時期に、抗日闘争の先進となることで完結する。

ティントゥンの困難は、植民地下級官吏の悲哀を息子の立身出世で晴らそうとする父の盲愛、植民地政府や日本軍の弾圧、闘争の主体たるべき我等ビルマ人協会や学生連盟の内部分裂など、あくまで当時の社会矛盾と大きくかかわった。植民地ビルマでは、個人の運命は祖国の運命と一体化する。自覚的な個人の解放と自己実現は、祖国の解放なくして考えられない。植民地の青年知識人の自己完結は、デイヴィッドのように個人的成功で紳士の世界に仲間入りすることではなく、解放闘争の先進となることであった。

自己形成の相違と並ぶもう一つの大きな相違は、主人公を取り巻く人物像の役割である。自己形成の重要な要素・女性との愛は、「デイヴィッド・コパフィールド」では、主人公の薄幸の母を思わせる幼な妻ドーラとの結婚と死別、常々姉のように彼を支えた気高いアグニスとの再婚に描かれる。しかし愛の波乱は、作品全体を柱として支えない。なぜなら、四十余名の登場人物の中でも個性豊かな主要人物が、主人公をしのぐ人間臭い魅力を持ち、主人公の知らないところでも交流し、それが筋に偶然の出会いや意外な展開をもたらすからである。

例えば、デイヴィッドが淡い好意を抱くエミリーは、許婚のハムを捨て、デイヴィッドが劣等感まじりの好意を抱く、紳士然としたスティアフォースと出奔し、乳母ペゴティーの兄がそれを追跡する。また、債権地獄から不死鳥の如くよみがえる隣人ミコーバー氏は、デイヴィッドの善良な学友トラドルズと共に、仇敵ユライアを追いつめる。紳士の欺瞞と庶民の健全、あるいは善良と邪悪を対比するこれらの傍筋は、学習という点でデイヴィッドの自己形成と無関係でないとはいえ、彼の私事からはやや遠ざかる。

一方、「東より日出ずるが如く」では、二百余名の登場人物のほとんどが実在実名で、うち五十余名がティントゥンと直接かかわる。彼と四名の女性との愛は、独立闘争と並ぶ自己形成の要素となる。特異な容貌と性癖の唯一の悪役・日本軍特務の手先タキン・ティンダーも、彼女たちの描写を食うほどの存在ではない。人物群像の円心にティントゥンがいて、人々との交流が彼の高揚や低迷に個別に影響する。

このように二作は、内容的にはまったく異なる作品であった。その共通点は、主人公の一人称の視点、自己形成を大枠とした筋、随想風自伝的に語られる冒頭の生いたちなど、形式的側面にのみ

見い出せた。ここから何らかの影響関係が導きだせるか否かを、次は受容の過程から探してみたい。

## 2

外国人作家の中ではディケンズを、彼の作品の中では「デイヴィッド・コパフィールド」を最も好んだティンペーミンは、他にどのような外国作品にふれたのか。彼はビルマ近代作家の中では、外国文学を多読する方ではなく、それに関する評論も皆無に近い<sup>10</sup>。わずかに彼の自伝などに外国文学<sup>11</sup>、主に英文学との出会いが語られるだけである。

それによると、彼が英文学と集中的に出会ったのは、植民地教育体制の中・高等教育英語授業の中である。高校<sup>12</sup> 教科書には、「シェイクスピア物語」、挿絵付き要約版の「ゼンダ城の虜」、「ソロモン王の洞窟」<sup>13</sup>、「デイヴィッド・コパフィールド」、大学<sup>14</sup> ではシェイクスピア戯曲、「エレホン」<sup>15</sup>、ワーズワースやシェリーやキーツの詩、それにディケンズの「大いなる遺産」が使われた。

このうち、ティンペーミンはディケンズに次いでシェイクスピア (1564-1616) を好んだ。その理由を彼は次のように述べる。

「彼の配役には、人間も神も動物も一通り揃っている。しかしすべての配役が、人間社会の内実を反映するものばかりだ。

シェイクスピアは、あらゆる種類の登場人物の語る言葉や振舞や出来事を描きながら、人文主義と人間の基本的価値を謳歌した。」<sup>16</sup>

とりわけティンペーミンは、シャイロックの金欲、マクベスの権力欲、リア王の姉娘たちの恩知らずな狡猾さなどの悪の描写に興味をそそられている。

個々の作品では、彼は「テンペスト」<sup>17</sup> と「ロミオとジュリエット」を好んだ。「テンペスト」について、「実に愛すべき物語である。この物語は、私の空想力を雲の上へと昇らせ、宇宙の果てへとばたかせた。プロスペローは私の英雄となった。」<sup>18</sup> と述べられる。

幼い頃から芝居好きで、学生芝居の脚本も書いていたティンペーミンは、ビルマの人形芝居の行者<sup>19</sup> を王子や王女以上に愛した。薬を調合し、空を飛び回る行者を、自然を克服した人間の象徴ととらえた。彼は、人間と精霊の混在する「テンペスト」の世界に、ビルマ伝統芸能の世界を、プロスペローの中に超人・行者の姿をだぶらせた。

「ロミオとジュリエット」は、肉身に生じていた類似の事件<sup>20</sup> を彼に想起させ、特別身近なものに感じられている。この戯曲は、引き裂かれた愛、死による解決という悲話だが、既に数ヶ国の作品を経て戯曲に昇華されたものだけ<sup>21</sup> に、国境を越えた共感を彼に与えた。

英国大衆小説の系譜に属する作品は、ティンペーミンのクラス中を熱中させた。ビルマで再々翻案、翻訳、映画化される<sup>22</sup> 人気小説「ゼンダ城の虜」を彼も、「小説全体が、明暗の影づけの巧みな、筆使いの秀れた絵画の如く芸術的」<sup>23</sup> と讃え、教科書全文の暗唱までするという打ち込みよう

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コパフィールド」の影響について

であった。

同様にビルマで愛好される<sup>24)</sup> ハガードの秘境・古代もの「ソロモン王の洞窟」も、生徒たちをハガード熱にかりたてた。他のハガード作品に取り組む彼らに習って、ティンペーミンも、同じく冒険家の記録形式による一人称小説「洞窟の女王」「二人の女王」「女王の復活」<sup>25)</sup>へと読み進む。

これらの受容を強力に支えたものが、高校での英語の授業<sup>26)</sup>の魅力だった。そこでは英語だけが使用され、テキストはただの語学教材ではなく文学作品として分析批評され、その他の外国文学についても講じられた。さらに英文エッセイの執筆が課せられ、文章作法が教えられた。この作業はその後の彼の執筆活動、とりわけ政治関係の原稿執筆に役立ったという<sup>27)</sup>。

それに比べると、大学の英文学の講義は魅力に乏しく、「文学的な知識、鑑賞、技法のいずれも、高校時代よりずば抜けて高度だとは言い難い。高校時代に得たものを定着させる程度」<sup>28)</sup>であった。

「私は『ソロモン王の洞窟』、『ゼンダ城の虜』、『デイヴィッド・コパフィールド』を読んで以来、小説を書きたい気持が生じた」<sup>29)</sup>と、彼は高校時代に小説家を志す。彼は、これらの教科書から、創作に関する多くを学んだ。

例えば、「ソロモン王の洞窟」の序文「鋭い槍は磨く必要がない」<sup>30)</sup>という一文は、彼の座右の銘となっている。内容が真実ならば美辞麗句は不要という主張は、当時の英国文壇に放たれているが、ティンペーミンにとっては、ビルマ近代散文への福音であった。それは「私の文学観と文体におおいに影響を与えた序文であった。学校のエッセイを書くにしても、小説や評論を書くにしても、やさしい用語とごく普通の表現で書くよう努力した。」<sup>31)</sup>

また、筋や人物描写は印象的ではなかったという「エレホン」も、その強烈な皮肉や風刺を示すための人名地名の音韻転換を、彼は未完の長編「女傑」(1934)<sup>32)</sup>にとりいれたという<sup>33)</sup>。そして、「ロミオとジュリエット」も、彼の処女作短編「愛国者キン」(1933)<sup>34)</sup>の構成文体に影響を与えたという<sup>35)</sup>。

ティンペーミンが古今の英文学からそうした示唆を得たのは、そこに描かれる世界を先進国の異文化として学んだためではない。ビルマ伝統文学に共通する題材や、国境を越えた人間の営為が、従来のビルマ文学をしのぐ洗練された形式で描かれていたためである。彼は「ロミオとジュリエット」についても、次のように述べる。

「いかなる国にもそういった類の話はある。しかし、シェイクスピアの筆の巧みさゆえに、世界で最高のものとなった。人間性の描写にすぐれ、文章は豊かで美しく、比喩や踏韻による装飾がたっぷりしている。」<sup>36)</sup>

シェイクスピア作品の背景をなす世界は、王朝時代終焉の余燻くすぶるビルマにとっては、つい昨日の世界であった。その豊饒なせりふのやりとり、軽妙な洒落や、比喩、教訓の類もまた、ビルマ宮廷文学の執拗な表現に慣れ親しんだティンペーミンに、違和感なく受容された。むしろ、従来のビルマ文学に欠ける人物描写や構成力が、新鮮な魅力となったと言えよう。

また、ハガードが英国で熱狂的に歓迎されたのは、帝国主義国家の国民から見た「未開」「探検」

が新鮮であったからだろうが、それは、ビルマ人にとっては神秘でも新鮮でもない。宝探しも、厳しい自然との闘いも、呪術も、輪廻転生も、その伝統芸能や文学の世界のみならず、日常の中に存在した。ハガードがティンペーミンをひきつけたのも、それらを表現する小説という洗練された形式のゆえであった。

当時のビルマ小説に対する充たされぬ思いを、ティンペーミンは長編「ストライキ学生」(1938)の主人公で彼の分身ともいべきニョウトゥンに、こう吐露させている。

「ぼくも小説は好きさ。でも、良い小説を読みたくたって、ビルマ文学の中では見い出せない。我が国の小説は俗悪だ。ピーモウニンだけだね。小説家の名に値するのは」<sup>37)</sup>

ニョウトゥンは、英語で外国文学を読めと友人に勧め、さらに語る。

「上手なビルマ語を書くためにビルマ語の小説を読むなら、君の文まで駄目になるよ。奴さんたちの文は、スタイルなんて眼中にない」<sup>38)</sup>

ニョウトゥンは、ビルマ語の運用能力を磨く程度にビルマ古典作品に目通ししておき、あとはすぐれた英語の文章から学ぶべきだと主張する。

ティンペーミンは、同じ学校教材であったビルマ文学<sup>39)</sup>も熱心に読んでいる。しかし後年「読んだ時の感覚だけが記憶に残っている」<sup>40)</sup>という感性的受容であった。彼の感性を魅了した小説「シェーピーソウ」や「キンミンダー」も、一部に韻文を混じえるなど、形式的には宮廷文学の名残を留めた。彼はタキン・バタウンの散文にも一目置き、翻訳家としては彼を評価するが<sup>41)</sup>、小説家としては、芝居がかった大仰な表現を用いないピーモウニン<sup>42)</sup>のみを評価した。

ビルマ語が公用語としての市民権を得ない植民地社会において、ビルマ語散文で小説を書く作家は、貧困とたたかいながら創作せざるを得なかった。ピーモウニンもその例にもれず、短い生涯を不遇のうちに燃え尽きてている。質の高い散文小説に恵まれぬビルマ文芸界に飽き足りなかったティンペーミンは、その限られた英文学との出会いの中に、近代散文の範を求めたのであった。

なお彼にとって、英詩だけは難解かつ退屈であったという<sup>43)</sup>。すでに作家活動と共に政治活動を開始していた大学時代、彼は、英詩はもとよりビルマ詩さえ軟弱なものとして拒否する頑迷さを持っていた。彼はペンを独立闘争の武器に用いて、その主張を効果的に表現する手段として散文小説を選んでいたので、抽象的、象徴的な詩歌に魅力を感じなかったのである。

### 3

ティンペーミンはディケンズを、「英国小説家中最も有名で人気があった」<sup>44)</sup>という。が、彼がディケンズにふれた1920年代末から30年代は、英国国内でのディケンズの評価が低落していた時代である<sup>45)</sup>。またビルマ国内でも、ディケンズは最も人気のある英国人作家の部類に入らない<sup>46)</sup>。彼がふれた限られた英文学の中で、ディケンズが最も魅力あふれる作家であったというわけなのである。

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コパフィールド」の影響について

英文学からビルマ文学にない形式的新しさを学び取った彼が、ディケンズの「デイヴィッド・コパフィールド」を好んだのは、そこに卓越した新しい魅力を見出した故と思われる。それは何だったのか。再びその自伝から探ってみよう。

彼は、ディケンズがこの作品を最愛の子のように愛したことを引用し、「私も『デイヴィッド・コパフィールド』が、他の英国小説よりもずっと好きだった」<sup>47)</sup>と述べる。そしてその理由に、「主人公の痛々しい境遇」と「比類なくすばらしい文学表現」をあげる。

具体的に前者には、出生前の父の死、母の再婚相手の非情さ、非力の母の控え目な愛と死、奉公先での過酷な労働をあげる。さらに「当時の非常にむごい少年労働の問題がとらえられている。工場や仕事場の光景が描かれている。工場主や社主の情知らずの搾取的性格を浮き彫りにしている」と、「困苦と哀れに満ちた」主人公の人生の背景の社会問題にも注目している<sup>48)</sup>。

後者の、「表現」については「デイヴィッドが見たとおり、考えたとおりに書いているので」<sup>49)</sup>実に巧みだと、一人称の語りの効用を認める。他の英文学同様、この作品も異文化としてでなく、ビルマの日常と溶け合って受容された。例えば、バーキスののろまな馬車は、彼が幼い頃眠ったまま揺られていった牛車を、ハムに背負われるデイヴィッドは、幼い頃村の若い衆に背負われたことを彼に思い出させたという<sup>50)</sup>。

これらの述懐から、彼がこの作品に見出した、他の作家にない魅力は次のように考えられる。

同じ教科書の「シェイクスピア物語」は、300年前の英語を意識して会話に生かしたという<sup>51)</sup> 散文小説であった。内容的に学ぶところはあれ、散文小説の近代的範とは言い難い面がある。

逆に、「デイヴィッド・コパフィールド」同様の一人称の回想形式である上、形式面で多くの示唆を与えた「ゼンダ城の虜」やハガードのシリーズは、社会性の薄い冒険物であり、内容的に学ぶところは少ない。それらに対して、「デイヴィッド・コパフィールド」は、社会性のある日常的な現実が、巧みな表現で描かれた。つまり、彼にとってのこの作品の魅力は、内容と形式の統一されて近代散文小説としての魅力だったと言えよう。

しかし、そのような魅力は、ディケンズ作品にはほぼ共通するものであろう。彼が読んだ他のディケンズ作品をしのぐ、どのような魅力が「デイヴィッド・コパフィールド」にはあったのか。彼は自伝でそのあたりにこうふれている。

「十学年の時ハルーン先生の指導で『デイヴィッド・コパフィールド』を学んでいた私にとっては、大学で『大いなる遺産』を学んだからといって、ディケンズ文学に関する知識や鑑賞眼が目に見えて深まったわけではなかった。しかしながら、私はディケンズの作品を自分で読み進めた。『ピクウィック・クラブ』、『オリヴァー・トウィスト』、『二都物語』など」<sup>52)</sup>。

これらを読んで彼は、デイヴィッドとベッツィーを「大いなる遺産」(1861)のピップやハヴィンジャムと比較したり、筋に重点を置く小説と置かない小説の比較などを試みたという。しかし、それ以上それらへの言及はない。それらは、彼の「デイヴィッド・コパフィールド」理解を補うものにすぎなかったようである。



それらの作品も社会性や巧みな表現を持つとはいえ、「ピクウィック・クラブ」(1836-37)は筋に一貫性がなく、一方「オリヴァー・ツイスト」(1837-38)や「二都物語」(1859)は、自己形成が描かれず筋の展開が重要であるなど、「デイヴィッド・コパフィールド」とは異なる性格の小説である。

しかし、「デイヴィッド・コパフィールド」同様の一人称回想形式で自己形成を語り、それ以上の劇的展開を見せる点で、遙かに近代小説らしい「大いなる遺産」に、ティンペミンがさほど心を動かされた様子がないのはなぜか。

「大いなる遺産」は、紳士めざして成り上がろうとするピップが、挫折によって内的成長するのに対し、人生に勝利するデイヴィッドは、内面的深みに欠ける。個性的人物や社会批判でも、「大いなる遺産」は「デイヴィッド・コパフィールド」に勝るとも劣らない。ティンペミンの関心事が、自己形成の展開になかったからか。それとも彼が「大いなる遺産」の暗さより、「デイヴィッド・コパフィールド」の余裕たっぷりの楽天性やユーモアを好んだからか。

彼が「デイヴィッド・コパフィールド」のどこにひかれたかを明らかにするために、再びこの作品への彼の印象にたちかえろう。彼は「デイヴィッド・コパフィールド」の中で印象深い情景や人物として、デイヴィッド誕生真近かの医者の子せかせかせした動きと伯母ベッツィーの悠然たる態度、夫に裏切られて以来、男を憎んで男の子すら嫌うベッツィー、つまらぬ話を聞くまいと真綿の耳栓をつめるその奇行(第1章)、りんごとまちがえて小鳥がついばみそうな赤く固い頬の乳母ペゴティー(第2章)、運送屋パーキスののろまな馬(第3章)、大男のくせに童顔のハム(第3章)、口笛を吹こうとするが音が出ず馬の耳を眺めるパーキス(第5章)、ペゴティーへのパーキスの風変わりな求愛(第5章、第8章)、二人のひどくあっさりした結婚(第10章)、頭が卵のようにつるつるで、どうにかなるが口ぐせのミコーバー(第11章)などをあげる。

ここからあきらかになるのは、第一にティンペミンが、「主人公の痛々しい境遇」よりむしろ「比類なくすばらしい表現」に、つまり、物語の進行係であると同時に鋭い観察者である主人公が語る細部の描写にひきつけられていることである。

第二に、これら印象的情景や人物が、すべて冒頭の生いたち部分に集中することである。その後登場する重要人物、例えばアグニス、ユライアのみか、生いたち部分に出ている筈の個性的学友スティアフォースやトラドルズ、それにエミリーまでもが無視される。最愛の書といいながら、その四分の三にも及ぶ範囲の印象が語られないのは奇妙である。しかもこの四分の三の内容はもはや、ティンペミンのいう、主人公の「痛々しい境遇」ではないのである。

そこで問題となるのが、彼が読んだという教科書である。当時高校教科書として出版されていた「デイヴィッド・コパフィールド」には三種類あった。第一は、児童向けにやさしく書き改めた要約版、第二はオリジナル版、第三は原文に加筆修正せず、「長すぎる詳細部分を取り除き、コンパクトにして出版されたもの」<sup>54)</sup>であり、彼の教科書は第三のものであった。省略箇所は明らかではない。

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コパフィールド」の影響について

テインペーミンの印象部分から察するに、その第三の教科書は、冒頭の生いたちの回想だけのものだったのではあるまいか。そこからさらに、エミリーら数名のかかわる箇所が省略されていたのではないかと考えられる。その後の彼の述懐を見ても、翻訳を含めて彼が全章を通読した可能性はほとんど考えられない。

この部分は少年時代のみで、自己形成のごく初期にすぎないから、テインペーミンがこれを自己形成の小説として認識していた可能性も極めて薄い。とすれば、「大いなる遺産」に彼が関心を示さなかったこともうなづけよう。

テインペーミンがディケンズの主人公たちの自己形成に関心を持たなかったのはなぜか。ディケンズの自己形成は、紳士の世界の仲間入りをすることで完結する。傍流の大衆小説でさえ、本国を離れて放浪する主人公たちは「紳士」を強く意識させられる。「ゼンダ城の虜」のルドルフは、紳士らしく堂々と戦っていきさぎよく身を引くが、紳士の面子が真実の愛の障害となる。「ソロモン王の洞窟」のアランは、危険のさなかにも紳士のあるべき姿に思いを馳せる。しかしテインペーミンは、彼らの紳士への執着に注目さえしない。女王陛下の忠実な臣民たる紳士の幸福が、植民地搾取を不可欠の条件とする以上、彼は紳士を目標とする自己形成に何の共感も見い出せなかったのであろう。

冒頭部分だけの「デイヴィッド・コパフィールド」が彼の愛読書となったのは、それが少年の苦難の生いたちを描いて、児童文学的まとまりをも持ち、それなりに完成度のある作品になり得ていたからではないか。

他の作品にない、この部分だけの特徴は、少年時代が自伝的にゆったり回想されたことである。テインペーミンがひきつけられた、日常的現実の効果的な描写は、自伝的回想の世界を与えられて最も輝きを放ったといえよう。

## 4

以上の受容経緯から、二作の共通点と影響関係の有無へたちかえることにしよう。まず、第一の共通点であった自己形成は、「デイヴィッド・コパフィールド」とはかかわりのないことが明きらかになった。テインペーミンが読んだ冒頭部分は自己形成の初期にすぎず、彼はディケンズの主人公の自己形成そのものに関心を持たなかった。彼の作品で人物の成長過程を描いたものは、「東より日出ずるが如く」以外にもあり<sup>59)</sup>、いずれも彼自身の必要性から生みだされたものと考えられる。

第二の共通点である一人称の視点もまた、「デイヴィッド・コパフィールド」のもたらしたものととは考え難い。なぜならそれは、大衆小説はじめ彼のふれた他の英語作品にも見い出せた。彼はその上、「東より日出ずるが如く」以前にも一人称小説を書いている<sup>59)</sup>。それらには、一人称を用いる彼なりの理由があったと考えられ、「東より日出ずるが如く」の一人称は、むしろそれらの延長線上に存在するものである。

第三の共通点である、自伝的随想風語りによる生いたちは、受容の経緯から、他の作品に見られぬ「デイヴィッド・コパフィールド」独自の特徴であり、かつティンペミンを最もひきつけた特徴でもあることが、明きらかになった。では、この第三の共通点を二作の影響関係と結びつけることは可能か。

実は、この部分が強烈な印象を与えただけでなく、「東より日出ずるが如く」執筆時のティンペミンの頭に、無意識にせよ去来していたことを物語る箇所が、作中見い出せる。第29章「老嬢の浄財」で、ティントゥンが、資金カンパと夕食の施食を受けに富豪宅を訪れる。家長で、五人の老嬢の敵母の描写に次の部分がある。

「老婦人がうつむいて自分の体を見たので、ぼくもついつられてそこを見た。すると、老婦人のエンダーに小さなポケットがついているのが目に入った。老婦人はポケットを探って、丸めた綿を取り出した。そしてそれを両耳に詰めこんでふさいだ。これは、娘たちに言いたいことを言っよいいという許可の合図だと思われた。」<sup>57)</sup>

耳栓をした老婦人は悠然と食事をし、ティントゥンは40才から60才までの4名の老嬢のおしゃべりの渦にさらされる。

一方、「デイヴィッド・コパフィールド」第1章「出生」で、ベッツィーの奇行が次のように描かれる。(なおこの章は出生前ゆえデイヴィッドのみの視点ではない。)

「医者と看護婦の連合軍は、それぞれ数分のちがいで到着したが、見ると炉のまえには、帽子を左腕に結わえつけ、耳には宝石屋の包み綿の栓をした、おそろしく物々しい格好の見知らぬ女が一人、すわりこんでいるのを見て、すっかり驚いてしまった。……略……なおポケットには、まだ宝石屋の包み綿をしこたまつめこんでおり、そのまた一部をそんなふうに奇妙な耳の栓に使っているのだが、それでいて威容は一向に崩れていないのだった」

彼女と対座するはめになった気の弱い医者がその耳栓のことを問う。

『「なんですって！」伯母は、まるでコルク栓のように詰め綿をひっぱり出して答えた。

チリップ先生は、その素早さにすっかり氣<sup>け</sup>庄<sup>お</sup>されてしまい—とは、後になって母に言った言葉なのだが—やっと度を失わなかったのが、せめて関の山というところだった。だが、彼は、もう一度やさしくくりかえしてみた。

『「なにか耳でもお悪いんで？」

『「つまらん話だねえ！」そう答えて、伯母はまたびたりと栓をしてしまった。」<sup>58)</sup>

ベッツィー伯母はこのあとも、必要が生じればその都度耳栓をはずし、医者に言いたいことだけ伝えてすぐ閉じるという振舞に及ぶ。耳栓に関する描写とその効果は、「デイヴィッド・コパフィールド」の方がはるかに強烈である。頑強に世捨人の独身生活を送る男嫌いの雷伯母と、社会と隔絶した豪壮な屋敷の奥深く、五人の老嬢の上に女王の如く君臨する敵母、この個性的な二人の女の使用する耳栓は、偶然の符合であろうか。

この場面はティンペミンの自伝でも、「知らせを待つベッツィーと多忙の医者の描写は、最良

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コパフィールド」の影響について

の場面の一つ<sup>59)</sup>と述べられる。その印象の強さがうかがえるというものである。これが敵母像への無意識の暗示を与えたとすれば、「東より日出ずるが如く」執筆中のテインペーミンの脳裏には、「デイヴィッド・コパフィールド」冒頭部分がなお徘徊し続けていたことになりはしまいか。

そこで、二作の冒頭部分の意味をあらためて考えてみたい。ディケンズにとって、「デイヴィッド・コパフィールド」は特別な意味を持つ作品であった。作者の「実人生を、他のどの小説よりも多く、あからさまにとり入れた」<sup>60)</sup>からである。それはまた、作者の生いたちを初めて語った作品であった。彼が十二歳の時、一家は破産のため負債者監獄に入り、彼だけが靴墨工場で劣悪な労働条件のもと、数ヶ月働き続けた。彼はこれを、屈辱的体験として長年胸に秘めていた。そしていったん自伝も書きかけたが、あまりの惨めさに断念し、作家生活半ばでようやく、デイヴィッドの少年時代にそれを織りこんだという<sup>61)</sup>。

冒頭部分には、さらに幼少時の牧歌的環境も語られるが、破産事件はそのままではなく形を変えられる。靴墨工場の苦汁は酒瓶屋での奉公に、作者の両親の姿は破産をくりかえしながらも楽天的なミコーパー夫妻へと変えられる。自伝をこのように変えてしまったのは、作家として成功した後もなお、ディケンズが階級意識先鋭な紳士の世界にあっては、自己の苦節を汚点としてとらえており、それをあからさまに語ることを恥じぬほどの自己解放をなしえていなかったことを意味するのではなかろうか。

一方、「東より日出ずるが如く」も、初めて作者が自伝をとり入れた小説であった<sup>62)</sup>。とりわけ冒頭の5章では、自伝はほぼそのままの形で用いられる。出生地、親の職業と性格、学校生活、ラングーン大学に進学してカマーユッ地区に下宿するまでのティントゥンの環境は、自伝どおりである。

しかし、ティントゥンは作者とは異なる性格を与えられる。彼は作者より2、3才若い。この時期の2、3年の差は無視できない。主人公の進学当時、すでに我等ビルマ人協会の影響が学生運動に及んでいた。先進的な一匹狼の作者と異なり、ティントゥンは「波間を漂うほていあおいさながら」<sup>63)</sup>付和雷同的に運動に加わる。

この部分は「この物語で重要な役割を演じるべくという人間」<sup>64)</sup>を読者に理解させる箇所である。完全無欠の英雄でなく、人格未完成ではありながら、基本的には民族的自我が覚醒しており、きたるべき大闘争参加の下地を持ったティントゥンの性格が説明される。作者の自伝は、それに現実性を持たせるために効果的に活用された。

第二の部分で、いったん作者とティントゥンは完全に分離する。テインペーミンは先輩活動家として、ティントゥンと交流する。作者は在学中から政治と文学を両立させた。政治活動を理由に当局から強制入寮させられ、卒業後専業作家、インド留学を経て、帰国して1300年闘争に学生スト指導でかかわる。一方ティントゥンは、入寮せず地域で生活し、中級指導者としてストに参加する。

この部分で記録性が増すのは、テインペーミンが、歴史的眞実の客観的再現の必要性を痛切に感じていたためである。というのは、1300年闘争の学生スト解除問題の総括がいまだ定まらず<sup>65)</sup>、解

除の責任者として彼が我等ビルマ人協会を除名されたという汚点もさることながら、日本軍のビルマ侵略を円滑ならしめた原因が、1300年闘争の総括と無関係ではないと彼がとらえていたためである。彼は、闘争直後にいったん回顧録を書きかけ、断念した。そして、十数年後に、自分とは全く異なる、平凡で動揺しやすい中級指導者の個人的体験として、事実を客観的に描こうと努めた。

第三の部分で、作者とティントゥンは再接近する。人民革命党<sup>66)</sup>への入党や、ラングーン空襲や、日本軍からの武器受取りのための待機などで、作者の体験が主人公のそれと重なる。人妻マ・ミヤフミーとのシャン旅行は、1939年の中緬公路見学のための作者一人旅の体験も生かされているであろうし、中でもインレー湖の描写には、恩師ハルーンのインレー湖に関するエッセイの影響があるという<sup>67)</sup>。

ただ、人民革命党入党の動機は各々異なる。ティントゥンは、当時の進歩的青年の典型として、1300年闘争の挫折を武器を持たなかったことによるものととらえ、日本軍の武器と資金の力で独立のための武装闘争を戦うために入党するが、作者は当初より日本軍を過信せず、ひたすら、日本軍の力を利用して英国をビルマから追い出し、その後ただちにビルマ人の政府を樹立して日本軍と闘うという空想的な持論を宣伝するため<sup>68)</sup>に、入党する。

日本軍の武器投下がなかったことで日本軍を疑い出したティントゥンは、同じ人民革命党の同志であるティンペーミンと接触して、急速に彼の思想に近づく。作者が国内を潜伏の後インドに脱出するのに対し、ティントゥンは日本軍政下のラングーンに潜入して抗日闘争に入る。作者の潜伏時の体験は、ティントゥンのマンダレー・ラングーン間の旅に生かされ<sup>69)</sup>、結末においてティントゥンは国内に留まるもう一人のティンペーミンに昇華させられる。

ティントゥンの印象として自在に語られる人びとのほとんどが、作者とのかかわりを持つ実在の人物である。また、自伝と照合すると、実名ではないがモデルになった人々の存在も明きらかになる<sup>70)</sup>。なお、女性像だけは、特定のモデルはなく、数名の実在の女性の混合だという<sup>71)</sup>。

ティントゥンの両親は、作者の両親がそのまま用いられる。ラングーンの息子を訪れ、その後故郷で突然死ぬのが、現実には父親でなく母親である点だけが異なる。作者の母親は1941年、父親は1956年に亡くなった。作中では、父の盲愛や虚栄が植民地下級官吏の悲哀のもたらすものとされるが、現実には作者は父親の死の日まで確執を持ち続けた。父が母を虐待し、母の死後娘ほどの歳の女性とすぐに再婚したことも原因である<sup>72)</sup>。

ディケンズの「デイヴィッド・コパフィールド」への思い入れとその自伝のかかわりを、ティンペーミンは知る由もなかったかもしれない。しかし、ディケンズの自己を語ろうとするひそかな熱意は、「デイヴィッド・コパフィールド」冒頭部分に迫真的な完成度をもたらし、高校授業の巧みさともあいまって、ティンペーミンに強い印象を与えた。それはまた、彼に作家志望の契起を与えた。未だ成熟にほど遠いビルマ近代散文小説に充たされなかった彼は、英文学に多くを求め、ついに「デイヴィッド・コパフィールド」に近代散文小説の範を見出した。

青春時代の柔軟な頭脳に刻印された「デイヴィッド・コパフィールド」の、たっぷりとしたユー

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コパフィールド」の影響について

モアや鋭い観察や巧みな筆さばきによる社会批評などに満ちた、自伝的随想的語り口の生いたち部分は、20年余の時の流れを越え、「東より日出ずるが如く」冒頭の生いたち部分の語り口や、敵母の耳栓の描写などによみがえった。それは意識的な模倣や改ざんではなく、作者独自の執筆動機による展開の中で無意識のうちに表出した、きわめてゆるやかな影響であったと言えよう。

自伝形式の、小説における現実的効果を認識したティンペーミンは、かくして自伝をその長編小説に利用したが、その用い方はディケンズのそれとおのずと異なった。ディケンズが、小説という虚構の中にひそかに自己を語ったのに対して、ティンペーミンは自伝を巧みに用いて自己を語るように見せ、小説に現実性を与えながらも、虚構の青春を創造したのであったから。

## お わ り に

ディケンズは、多くの外国作家に愛読され、あるいは影響を与え、翻訳されてきたという<sup>73)</sup>。ティンペーミンのように、無意識のうちに影響を与えられた作家も少なくなかろう。「東より日出ずるが如く」に影響を明確に与えたエレンブルグでさえ、ディケンズを少なからず意識しているふしがある<sup>74)</sup>。

外国文学の模倣・改ざんなどは、ある意味では文学史発展の原動力であり、原作をしのぐ改作も世界文学の中では珍らしくない。しかし、外国文学依拠をビルマ文学の質を低めるものとして批判してきたティンペーミンの代表作に、異なる時代と性格の二作家の影がみられたのは、二十世紀の激動のなせるわざであった。

なお、国内の社会問題に向けられたディケンズの批判の眼は、女王の軍隊の海外での「活躍」にまで向けられなかったからであろうか。「デイヴィッド・コパフィールド」の中では、インドも、ベッツィーの別れた夫が死んだらしい地（第1章）、デイヴィッドの師ストロングの妻の、いわくありげな従兄が士官候補生として赴任する地（第18章）、スティアフォースの「こんな楽しい晩に暖炉端を空けておくなんて—しかもこんな大事な席をですよ—ぼくは、たとえインドぜんたいの富をやると言われたって、断るな！」<sup>75)</sup>というせりふなど、遠くの異国ととらえられるだけである。

そのようなディケンズには、「デイヴィッド・コパフィールド」完成の2年後、1852年に、そのインドの隣のビルマの南半分が英領となったことも、いささかの感慨をもたらす事件ではなかったのかもしれない。そして当然のことながら、その死の15年後にビルマ全土が英領化され、高校教科書に使用された「デイヴィッド・コパフィールド」冒頭部分に刺激を受けた青年が作家となって、後にその影響をにおわす反植民地主義小説を書くなどとは、想像すらしなかったであろう。

一方、そのディケンズを愛したティンペーミンも、「デイヴィッド・コパフィールド」と「東より日出ずるが如く」が、各々の作者の作家生活において果たした役割の類似までは知る由もなかった。二作は、ともに作家生活の半ばで書かれた。「デイヴィッド・コパフィールド」は、ディケンズが小説を書きはじめて16年後にはじまり、彼が最後の小説を書く20年前に完結している。一方、

「東より日出ずるが如く」も、テインペーミンが小説を書きはじめた20年後にはじまり、彼が最後の小説を書く20年前に完結している。作家としての出発点で自伝を用いた作品を書く作家は珍しくないが、この二人は作家としての地位を確立した後、作家生活の折り返し点で初めて自伝を作品に取り入れた。そして、自伝を小説に取り入れる作業の中で来し方をふり返ったことにも一因があるのであろうか。これら自伝を取り入れた小説以降、二人の小説の傾向は変化していく<sup>76)</sup>。二作が、各々二人の作家の作風転換の節目に位置したというのは、興味深い偶然という他はない。

## 註

- 1) B-8 p. 54.
- 2) これについては J-37 参照のこと。
- 3) J-8 I p. 415 訳者後記。
- 4) 我等ビルマ人協会 (タキン党) は、1930年5月の印緬両民族衝突後に政治文書を配布して発足した政治結社。後に独立闘争の主要勢力となる。協会歌は YMBA・サヤー・ティン (1893-1950) らの創作。1930年7月19日ラングーン大学で初めて歌われた。B-13 (5) p. 44-45.
- 5) 古来日本でも天変地異の前に童歌の流行があるが、ビルマでも童子、旅芸人、狂人等の言った言葉や戯歌に予兆を見て運命を占う落兆が、混乱期に流行した。1940年前後には、コンバウン時代 (1752-1885) 崩壊直前に盛んだった歌が、新たな意味を帯びて復活した。
- 6) 1938-39年、ビルマ暦1300年にあたるこの時期に、油田労働者ストを発端として、我等ビルマ人協会の指導で闘われた、労働者・農民・学生らの反英植民地闘争。
- 7) E-2 の原題参照。主人公名を題名とすることは、「ジル・ブラース」「トム・ジョーンズ」「モル・フランダース」などの悪漢小説に見られる傾向であるが、ビルマでも初期の近代小説にこの傾向が見られる。
- 8) B-10 p. 206.
- 9) 自己形成が描かれるか否かが悪漢小説と教養小説の一つの境界であるが、この作品をディケンズ作品中悪漢小説の最も教養小説に接近したものととらえる J-33 のような考えと、教養小説最初のものにとらえる考えに別かれる。J-21 は後者の立場に立ち、父・女・金の3つが教養小説の主人公の遭遇する試練であり、これに対処しつつ成長することを、教養小説共通の特徴と見る。(p. 20-30) なお、教養小説は「紳士」から「芸術家」の自己形成を描くものに発展し、悪漢小説からは、主人公が社会改良を指向する社会小説が派生するとされる。本稿は、そうした小説の分類にこだわらず、主人公の自己形成にふれる。
- 10) シェイクスピアに関して、生誕400年を記念して戯曲の忠実な翻訳上演を主張した B-3 (初出1964)、宮廷劇作家ウー・ボンニャ (1812-66) 生誕150年にあたり、彼をビルマのシェイクスピアだと過大評価する傾向への反論 B-4 (初出1963) がある。
- 11) 英文学以外の英訳外国文学として「ボヴァリー夫人」(B-6 p. 132)、「母」,「静かなるドン」(B-9 p. 106)、「パリ陥落」(B-8 p. 53-54) があげられている。
- 12) 植民地ビルマの初・中等教育は、4・4・2の10年制で、ビルマ語学校、英語ビルマ語学校、英語学校の3種が併存した。テインペーミンは、6才でブダリン市内の寺小屋に学び、8才でビルマ語学校に入学。私塾で英語の特訓を受けて、1927年に英語・ビルマ語学校のモンユワ市ナショナルスクールに転校。さらに同年同市の仏教スクールに移る。ここに彼は卒業まで在籍し、英文学も学んだ。一学年25-30名、総数300名規模であった。
- 13) Charles & Mary Lamb (1775-1834, 1764-1847): "Tales From Shakespeare" 1877.  
シェイクスピア戯曲中主要な20編を物語にしたもの。邦訳は J-16 (13編のみ) と J-17 (全編)。  
Sir Anthony Hope Hawkins (1863-1933): "Prisoner of Zenda" 1894.  
架空の国に偶然立ち寄った、国王瓜二つの英国青年が、国王を幽閉して王位篡奪を企む王弟一派をむこう

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コバフィールド」の影響について

に回し、王の忠臣の助けを得て王を救出する三ヶ月間の物語。王の婚約者と青年の愛をからめる。邦訳は J-15.

**Sir Henry Rider Haggard (1856-1925): "King Solomon's Mines" 1885.**

行方不明の弟を捜索するカーティス卿、宝探しのグッド大佐とアランの北アフリカ砂漠決死行に、実はクアナ国王子である従者ウンパポの王位奪還劇をからめた冒険物。邦訳は J-12.

- 14) 1932年、彼はラングーン大学管轄下の5カレッジの一つマンドレー・インターミディエート・カレッジ(教養課程のみの二年制)文科に入学し、成績優秀のため一年で終了して、1933年ラングーン・ユニヴァーシティ・カレッジ文科に転入。1935年文学士となって卒業した。マンドレーでは、必須科目の基礎英語とビルマ語、選択科目からパーリー語、論理学、歴史を学び、ラングーンでは、ビルマ文学・英文学・近代ヨーロッパ史のコースを取った。
- 15) **Samuel Butler (1835-1902): "Erewhon or Over the Range" 1872.**  
ユートピアを意味するギリシア語の語源的な意味の綴り *nowhere* を逆にした国名をタイトルとし、この国でおこなわれるすべてが、当時のイギリスとは逆で、ヴィクトリア朝を風刺する小説。J-22 参照。邦訳(石原文夫訳 音羽書房 1979)
- 16) B-6 p. 122.
- 17) 国家論や劇中劇や詩歌も挿入。弟に地位を簞奪された元ミラノ大公プロスペローが娘と共に孤島に漂着し、魔法を修めて自在に妖精をあやつり、嵐を起こして復讐する。植民地侵略の前段階ともいえる新世界「発見」への関心もうかがえる。1610又は1611年発表の、最後の作という。邦訳 J-2.
- 18) B-6 p. 124-125.
- 19) 行者を意味するビルマ語ゾーチーは、元はゾーギーと呼ばれ、ヒンディー語のヨーギーに由来。人形芝居に欠かせぬ配役で、薬の調合や魔法などを得意とする超能力者。B-13 (4) p. 339-340.
- 20) テインペーミンの母の次姉が、美人で評判であったが、親どうしの不和で相思相愛の恋人との結婚を許されず心中。母方の祖母は発狂、祖父は彼女を捨て再婚。テインペーミンはこの祖母の物語る悲話を聞いて成長したという。B-6 p. 20-22.
- 21) 1595年頃の作といわれるが、イタリアの古い民話が小説になったものがフランスに渡り、詩となってイギリスに入ったものが戯曲化されたという。J-20 p. 218.
- 22) ビルマ風に改作された映画「マウン・デーウィ」が1920年代に上映。シュエーウダウン(1989-)による翻案「ティーターピャン」が1920年頃、ウー・チャーインによる翻訳が1938年に出ている。この作品と続編「ヘンツォのルパート」(1898)を合本とした全訳が1966年マンティン(1917-)によってなされている。
- 23) B-6 p. 136.
- 24) シュエーウダウン、ダゴン・シュエーフミャー(1895-)らによって20作余が訳される。
- 25) **"She" 1886.**  
アフリカを舞台に、不老不死の魅力的な美女アッシャ、その恋人の生まれ変わりである英人美青年レオとのめぐりあいが、醜男の学者でレオの後見人ホリーによって語られる。邦訳 J-13.  
**"Allan Quatermain" 1888.**  
「ソロモン王の洞窟」の3人が、ケニアの奥地に作られた双児の女王の君臨する古文明国を訪れる秘境もの。邦訳未見。  
**"Ayesha The Return of She" 1905.**  
「洞窟の女王」の続編。18年後、チベットを舞台に、中年になったレオと老人ホリーのアッシャ探し。邦訳 J-14.
- 26) モンユワ仏教スクール教師モハマッド・アリ・ハルーンによる。メルギー出身のムスリム・インド人で、妻がビルマ人。ラングーン大学を優秀な成績で卒業し、文学修士号を持つ。卓越した英語力の持ち主だったという。B-6 p. 60.
- 27) B-6 p. 150.
- 28) B-6 p. 225.



- 29) B-6 p. 144.
- 30) この序は、語り手であるアランのことばで、次の一文の中で語られる。  
 「さて、あとは私の不器用な文章について、読者にお詫びをさせていただいた。あえて弁解するならば、私はペンをもつよりも銃をもつことになれた人間なのだ。だから小説に見られるような——私もときには好んで小説を読むのだが——<sup>うん</sup>絢爛たる文章や美辞麗句は、とうていまねることができないのだ。たしかに絢爛たる文章や美辞麗句は好ましいものだし、そのような文章を読者に提供できないことを残念に思うが、同時にまた、簡潔さということが、つねにもっとも感銘的なのであって、書物も平易な言葉で書かれたほうが理解しやすいのではないかと思う。私はこのような問題について意見を述べる資格はないかもしれないが、ククアナ族の諺に『鋭い槍は磨く必要がない』というのがある。それと同じ考え方で、いかに奇妙な物語であっても、内容さえ真実ならば、あえて美しい文章で飾る必要はないと申しあげたい」 J-12 p. 9.
- 31) B-6 p. 129.
- 32) 初出は *Dagon* 誌1934年1, 2, 4, 6, 12月号1935年1月号に連載。B-6 p. 144-288 に転載。ラングーン大学を舞台に、民族意識の強い女子大生を主人公にする。実在人物が変名にされた。
- 33) B-6 p. 242.
- 34) 初出は *Dagon* 誌1933年9月。B-6 p. 195-220 に転載。テインペーミンは両家の不和の原因をムスリムと仏教の対立とし、娘の病死で閉じる。ナショナリズムをテーマとする。
- 35) B-6 p. 226.
- 36) B-6 p. 226.
- 37) B-5 p. 37.
- 38) B-5 p. 38.
- 39) 四年生までは「孔雀印国語読本」、その後は「十大ジャータカ」(18世紀後半 ウー・オーバター <1758頃-98頃> 作) と、「シュエーピーソウ」(1914 ウー・ラッ <1866-1921> 作) が教科書となった。彼は同時期に、「一匹狼」(ダゴン・シュエーフミャー <註24> 参照) 作)、「キンミンヂー」(1914 レーティーパディッタ・ウー・マウンダー <1876-1939> 作)、「ダビンシュエーティー」(1924-28同)の一部、「ネーイーイー」(1920 ピーモウニン <1883-1930> 作)、「テエミャニャー」(同)、「仲買人父子とミャミャ」(同)などを自主的に読む。  
 マンダレーカレッジのビルマ語教科書には「大王統史」(1714-33 ウー・カラー <1678頃-1738頃> 作)があげられるのみ。ラングーン大学のビルマ文学の教科書には、パガン時代(1044-1299)の碑文、「大須陀摩仏教叙事詩」(ウー・シュン <1782-1850頃> 作)、「仏聖伝註」(19世紀 チーテエレーダッ僧正シン・ムネインダビダザ作)、「ラーマ劇詩」(1784 ウー・トウ <1751-1796> 作)と、シン・ゼヤランダメイ(1578頃-1638頃)やシン・タンコウ(1598-1638頃)の叙事詩が用いられた。
- 40) B-6 p. 78.
- 41) B-7 p. 42.  
 タキン・パタウン(1901-)は我等ビルマ人協会創設者の一人で、翻訳の他、「テス」の翻案といわれる「パウンダーのマ・サウ」(1936)などでも有名。
- 42) 註39) 参照。
- 43) B-6 p. 222.
- 44) B-6 p. 138.
- 45) ディケンズ死後、二十世紀に入ってから、彼はヴィクトリア朝的偽善、悪趣味の権化として批評家の槍玉に上がり、二十世紀中頃から再評価されるに至ったという。J-34 p. 465.
- 46) 翻訳作品についてのまとまった資料はないが、B-11, B-12 からそれらの項目だけを取り出すと、最も多く翻訳された英作家はハガードで20編、次がハーディー(「カスターブリッジの市長」<1964>、「遠く世俗の仲間をよそに」<1912>、「帰郷」<1936>、「青い時」<1941>)、そしてシェイクスピア(「ロミオとジュリエット」<1912>、「ベニス商人」<1912, 53>、「ハムレット」<1953>、「リア王」<1953>、「ジュリアス・シーザー」<1953, 54, 66>)、それにウェルズ(「宇宙戦争」<1954>、「タイムマシン」<1954>)が統

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コパフィールド」の影響について

く。

〈 〉内はわかる範囲での発行年。註10) で述べたように、シェイクスピアの訳は戯曲の忠実な訳かどうか疑問。

なおディケンズは「デイヴィッド・コパフィールド」〈1960, 63, 73〉のみ。完訳かどうか未見。ディケンズのビルマでの代表的評価としては「英国社会の欠点を厳しく批判」「とりわけ身よりのない子供の人生を描く」「たいてい下層の労働者を主要人物にする」「彼の作品が英国の社会制度を変えた」B-13 (5) p. 319-320 など、必ずしも適切とは言い難い。

- 47) B-6 p. 138.
- 48) B-6 p. 138.
- 49) B-6 p. 140.
- 50) B-6 p. 140-142.
- 51) J-16 前がき p. 5.
- 52) B-6 p. 223.
- 53) B-6 p. 139-143.
- 54) B-6 p. 137.
- 55) 長編「海の旅人と真珠姫」(1969)の青年マウン・タンズィンに成長過程が見られる。
- 56) 長編「嘆きの歌」(1938), 「母」(1948), 「裏切り者だとは」(1949)。
- 57) J-11 上 p. 306.
- 58) J-8 I p. 15.
- 59) B-6 p. 142-143.
- 60) J-1 p. 189.
- 61) J-33 I p. 420-421 II p. 422-425.
- 62) それに先立つ48年、亡き母の思い出を生いたちと共に語った「母」は、当初エッセイとして書かれたが、編集者の希望で短編選集に入れたもの。「東より……」冒頭と共通する部分も少なくない。
- 63) J-11 上 p. 15.
- 64) J-11 上 p. 23.
- 65) J-39 p. 380-383.
- 66) 「東より……」(55, 58, 63, 69章)の中ではそれは1939年末か40年初頭に、武装蜂起で独立獲得するため作られた秘密組織で、資金は日本軍から流れたとされる。戦後はビルマ社会党と改称。
- 67) B-6 p. 64-65.  
ハルーンがラングーンタイムズにのせたエッセイを読んで以来、彼はインレー湖に憧れ続け、「東より……」にその影響があるという。
- 68) J-37 p. 53.
- 69) 日本軍の行状は E-1, 潜伏については B-2 に記されていることと共通する部分がある。
- 70) 主人公の家主ウーレー・ミンは、作者の父の友人で同じように作者が下宿した、トゥリヤ紙副職工長でやもめのウー・ポウティン、主人公が卒業後間借りした先の占い師ウー・テッシュェインは、作者の卒業後の同居人で透師術師のサヤー・チャー、主人公の恋人マ・キンティッの両親で教師のウー・シュエーペーと薬屋ドー・ニュン夫妻は、作者が卒業後就職したディードウ社を主宰するウー・パチョウとドー・フラマー夫妻をモデルにしたものと思われる。
- 71) J-11 下 p. 393 作者へのインタビューでそのように語っている。  
ティンペーミンは当時ディードウ・ウー・パチョウの娘の一人と恋仲であったが、結婚を反対されて別れ、大戦中にその女性は亡くなった。その姿はマ・キンティッにも反映されるかもしれないが、大戦中に死ぬ主人公のもう一人の恋人であるマ・ミンウーにも反映されたのではなからうか。また、マ・ミンウーの容姿は、作者の母の姿もうかがわせる。
- 72) B-1 で、父の死の直前の帰省が語られ、彼の複雑な思いがうかがえる。

- 73) トルストイ, ドストエフスキー, ゴーリキー, カフカ, プルーストラに愛され, 日本では「小桜新吉」(堺利彦)が「オリヴァー・トゥイスト」の翻案, 「思い出の記」(徳富蘆花)が「デイヴィッド・コパフィールド」の影響を受けたものという。また, 坪内逍遙, 夏目漱石, 菊池 寛, 林 房雄, 獅子文六らがディケンズに関心を寄せていた作家としてあげられる。  
J-33 II p. 431 J-34 p. 464-470.
- 74) 「作家と生活」(エレンブルグ他著『作家の仕事』中巻 青木文庫1956) p. 245 や, 『雪どけ』(小笠原豊樹訳 S. 40 集英社) P. 184 の, ディケンズを読みながら居眠りする画家の姿など。
- 75) J-8 I p. 286.
- 76) 「デイヴィッド・コパフィールド」は, 註9) の如く悪漢小説と教養小説の狭間に位置する, 転換点の作品である。教養小説としての完成度が増すと共に, ディケンズの作品は深みと暗さをともなった。その原因は, 私生活の問題そして, 紳士の世界を自己形成の究極目標とすることと社会批判の精神の矛盾によるとされる。(J-21 J-33 とも) また, 「東より……」以降ティンペーミンの小説から政治性社会性が薄れ, 一人称による随想風小説が増加したことについては J-38 参照。

## 参 考 文 献

- B- 1 Thein Pe Myint: 'Anya Pyan'—'Pyidhuja hma Ahman Sha' p. 229-322, 1964, Rangoon
- B- 2 Thein Pe Myint: "Sit atwin Hkayidhe" 1966, Rangoon
- B- 3 Thein Pe Myint: 'Ahnit Leyapyi Sheiksapiya'—'Taikpwe win Samya' p. 365-368, 1968, Rangoon
- B- 4 Thein Pe Myint: 'U Ponnya hnit Sheiksapiya ma Hnaing thin'—'Taikpwe win Samya' p. 363-365, 1968, Rangoon
- B- 5 Thein Pe Myint: "Dhabeik Hmauk Kyaungdha" 1970, Rangoon
- B- 6 Thein Pe Myint: "Kywundaw i Achitu" 1974, Rangoon
- B- 7 Thein Pe Myint: "Tethkit Tetlu Tethpounggyi Thein Pe" 1975, Rangoon
- B- 8 Thein Pe Myint: "Sapay Swenwebwe" 1975, Rangoon
- B- 9 Thein Pe Myint: "Sapay Bawa Zat Lanzoung" 3, 1981, Rangoon
- B-10 Min Yu Way: 'Ashega Newun Twetepama'—Taik Soe & Min Yu Way: "Myanmarza Meikpwe" II, p. 193-207, 1966, Rangoon
- B-11 Malihka: "Myanmar Wuthtu Anywunt" 1~5, 1968, 1970, 1971, 1972, 1973, Rangoon
- B-12 Malihka: "Myanmar Sapay Abeikdan" 1~3, 1974, 1974, 1977, Rangoon
- B-13 Myanmar Sapay Badhapyan Athin: "Myanmar Swezoungjan", (4), (5), 1960, 1961, Rangoon
- B-14 Thein Pe Myint "Wuthtudo Baunggyouk" 1966, Rangoon
- E- 1 Thein Pe Myint: "What Happened in Burma" 1943, Allahabad Kitabistan
- E- 2 Charles Dickens: "The Personal History, Adventures, Experience & Observations of David Copperfield The Younger of BLUNDERSTONE ROOKERY (Which He never meant to be Published on any Account)" 1950, The Modern Library, New York
- J- 1 アンガス・ウィルソン 松村昌家訳『ディケンズの世界』S. 54, 英宝社
- J- 2 ウィリアム・シェイクスピア 小田島雄志訳『テンベスト』1983, 白水社
- J- 3 ウィリアム・シェイクスピア 小田島雄志訳『ロミオとジュリエット』1983, 白水社
- J- 4 ウォルター・アレン 和田誠之助監修訳『イギリスの小説—批評と展望—(ヴィクトリア朝前期まで)』1975, 文理
- J- 5 ジョージ・サンブソン著 平井正穂監訳『ケンブリッジ版イギリス文学史』Ⅲ, 1978, 研究社
- J- 6 ディケンズ 山西英一訳『大いなる遺産』上下, S. 26, 新潮社

## 「東より日出ずるが如く」における「デイヴィッド・コバフィールド」の影響について

- J-7 ディケンズ 中野好夫訳『二都物語』上下, S. 42, 新潮社
- J-8 ディケンズ 中野好夫訳『デイヴィッド・コバフィールド』I II, S. 45, 集英社
- J-9 チャールズ・ディケンズ 北川梯二訳『ピクウィック・クラブ』1971, 三笠書房
- J-10 ディケンズ 小池 滋訳『オリヴァー・トウィスト』S. 52, 学習研究社
- J-11 テインペーミン 南田みどり訳『東より日出ずるが如く』上中下, 1988, 1989, 井村文化事業社
- J-12 H. R. ハガード 大久保康雄訳『ソロモン王の洞窟』1972, 創元社
- J-13 H. R. ハガード 大久保康雄訳『洞窟の女王』1974, 創元社
- J-14 H. R. ハガード 大久保康雄訳『女王の復活』1977, 創元社
- J-15 アンソニー・ホープ 井上 勇訳『ゼンダ城の虜』1970, 創元社
- J-16 ラム 松本恵子訳『シェイクスピア物語』S. 27, 新潮社
- J-17 ラム 野上弥生子訳「沙翁物語」—『野上弥生子全集第Ⅱ期』第二十巻 p. 41-446, 1987, 岩波書店
- J-20 蒲池美鶴「解説」—J-3 p. 216-226
- J-21 川本静子『イギリス教養小説の系譜「紳士」から「芸術家」へ』1973, 研究社
- J-22 岸本利昭『『エレホン』について』—『イギリスの風刺小説』p. 51-84, 1987, 東海大学出版会
- J-23 小池 滋「作家と作品 ディケンズ」I II—J-8 I p. 417-444, II p. 408-434
- J-24 小池 滋「解説 ディケンズ」—J-10 p. 457-476
- J-25 志智左右六「小説技法から見た“David Copperfield”の構造と登場人物」—『大阪産業大学紀要』16, 1967
- J-26 滝 裕子『ディケンズの人物たち その精神構造の諸相』S. 57, 槐書房
- J-27 南田みどり「二つの大戦前夜—『東より日出ずるが如く』への『パリ陥落』の影響について—」—『第二次世界大戦とアジア社会の変容』1986, 大阪外国語大学アジア研究会
- J-28 南田みどり「テインペーミンの小説世界」J-11 中 p. 335-366
- J-29 南田みどり「『東より日出ずるが如く』の成立事情など」J-11 下 p. 370-390
- J-30 三宅川正『英文学におけるユーモアと風刺の伝統』S. 56, 関西大学出版部

(1989.9.29)